=市史編さん便り=　【第２号】　令和３年５月６日（木）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

「市史編さん・編集合同委員会」５月 24 日(月)実施！

開催場所：土佐清水市立中央公民館３階・多目的室
開催時間：１４：００～１６：００(予定)
内　　容：◆各委員からの状況報告
◆代表編集委員からの実践報告
◆本年度の市史編さん事業の流れの確認
◆その他・執筆上の課題についての研修

上の日程にて、年度初めの標記合同委員会を開催することになりました。全委員のご都合に沿うことができず、調整が円滑にできなかったケースもあり、その点をお詫びします。よって日程の都合により、やむを得ず欠席される委員の方もおられますことを予めご承知おきください。島根県立三瓶自然館研究員に転職された今井悟編集委員につきましては遠路であり、会への出席依頼は行いませんでしたが、会議結果をお知らせし、原稿は期限までに必ず提出していただく予定です。

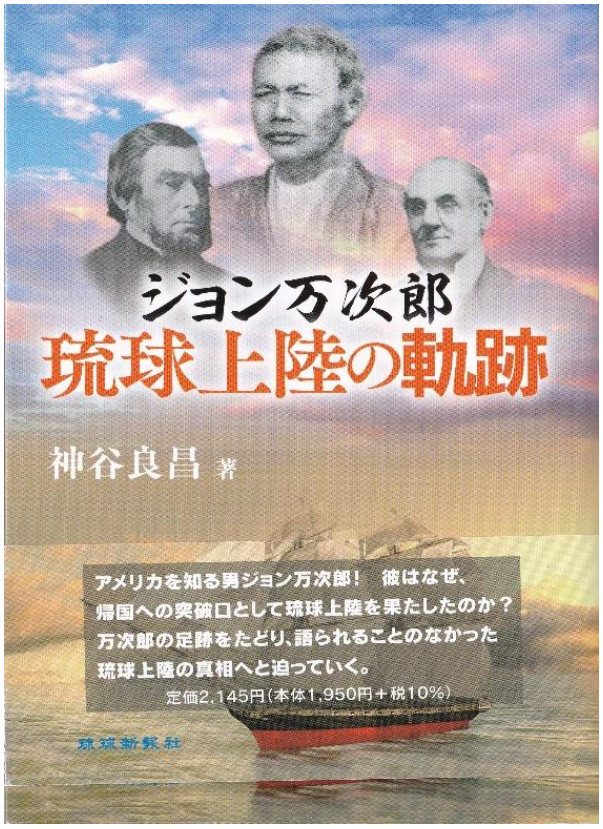
ここで、事前に市史編さん事業の本年度の取り組み（案）を簡単にご報告・掲載させていただきます。下記ご確認ください。

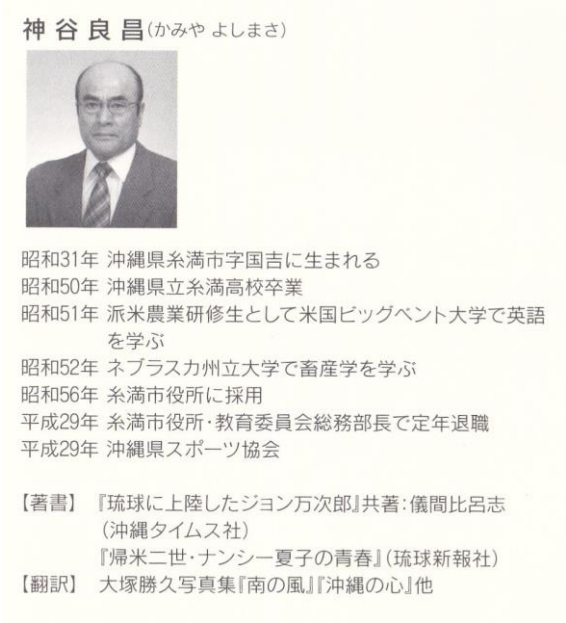
①執筆管理‥７月末までに一次原稿を完了させる。(データは紙ベースとデジタルベースにて)
※ただし、出原恵三委員の「戦争遺跡部分」、松田直則委員の「山城部分」については、３月末に調査が終了したばかりであり、期限を８月末までに延長したいと思います。

②市史の普及・啓発活動
‥⑴毎月の『広報とさしみず』「市史編さんコーナー」への投稿
⑵市史に関連する各種講座の開催・出前講座開催など
◇５月市立小中学校長会研修会(郷土史講話、民具見学など)
◇９月高知県更生保護女性会（会場；城西館、中浜万次郎について）
◇中央公民館歴史講座（２回程度予定・調整中）
◇図書館歴史講座（２回程度予定・調整中）
◇図書館での歴史展示（近代の『学校日誌』もしくは民具）
◇市内小中学校での出前社会科授業
◇民具や埋蔵文化財の小中高への社会科教材として貸出業務

③「令和３年度・市史編さん便り」の発行
‥市史編さん委員・編集委員の共通認識の醸成を目的に昨年は、第 30 号まで発行した。本年度は、プラス 10 号の第 40 号の発行をめざす。

神谷良昌『ジョン万次郎　琉球上陸の軌跡』（琉球新報社）が発刊！





神谷良昌（かみや よしまさ）

昭和31年 沖縄県糸満市字国吉に生まれる
昭和50年 沖縄県立糸満高校卒業
昭和51年 派米農業研修生として米国ビッグベント大学で英語を学ぶ
昭和52年 ネブラスカ州立大学で畜産学を学ぶ
昭和56年 糸満市役所に採用
平成29年 糸満市役所・教育委員会総務部長で定年退職
平成29年 沖縄県スポーツ協会

【著書】『琉球に上陸したジョン万次郎』共著：儀間比呂志（沖縄タイムス社）
『帰米二世・ナンシー夏子の青春』（琉球新報社）
【翻訳】大塚勝久写真集『南の風』『沖縄の心』他

ジョン万次郎 琉球上陸の軌跡
二〇二二年四月一四日初版第一刷発行
著者 神谷良昌
発行者 坂本城泰山
発行所 琉球新報社
〒九〇〇-〇〇二二
沖縄県那覇市泉崎一-〇-三
電話 〇九八-八六七-五一〇〇
FAX 〇九八-八六八-八〇六五
問合せ 琉球新報社読者事業局出版部
発売 琉球プロジェクト
電話 〇九八-八六八-一二四一
印刷所 新星出版株式会社
© Yoshimasa Kamiya 2022 Printed in Japan
ISBN978-4-8967-142-265-7
定価はカバーに表示してあります。
万一、落丁・乱丁の場合は取り替えいたします。

著者・神谷良昌氏は、ジョン万次郎上陸の地、沖縄県糸満市に在住され、公益財団法人沖縄県体育協会にお勤めしておられます。平成 30 年 11 月 4 日「第 7 回ジョン万サミット in 土佐清水」が開催された際に、私は神谷氏と名刺交換を行いました。

後日、氏より直接のご依頼があり、拙稿論文「近世・土佐藩における異国船漂着とその対応」（『西南四国歴史文化研究会論叢よど第 18 号』）をお送りしました。私の論文は「江戸時代の清水浦に琉球船が漂着し、漂着民の世話とその対応を浦庄屋中心に地域の人々が行った」「そのとき琉球の水夫が亡くなって蓮光寺庄屋墓所に丁重に埋葬されて墓碑が置かれた」という内容でした。そのことを神谷氏は今回の著書に紹介され、私の拙稿を参考文献としてご活用いただいた経緯がありました。

その縁で、神谷氏から新刊されたご著書をご恵与いただいた次第です。この書籍は、沖縄上陸から書き始め、これにこだわった、著者が長年研究してきたことを集大成した内容となっています。これまでとは異なった視点で万次郎の生き方を洞察した書籍であり、著者が長年研究してきたことを集大成した内容となっています。ジョン万を多角的・多面的に研究するための有効な資料になっています。興味のある方は、是非ご購入し、ご一読ください。

ご購入は、琉球新報社読者事業局出版部（電話 098-865-5100）もしくは「琉球新報ストアー」をネット検索すれば、簡単に注文できます。

市史編さんのブレイクタイム(28)

近世石造物から見た中浜浦・山城屋の系譜

（１）はじめに

今回は、近世末から近代にかけて中ノ浜浦を本拠にカツオ漁と節加工により隆盛を極めた山城屋の足跡について近世石造物をキーワードに取りまとめた。

山城屋の先祖は、永正７年（1510）に土佐一条氏初代当主一条房家（一条教房次男）に京都仁和寺（真言宗御室派総本山）の尊海が足摺岬金剛福寺住職を要請されて下向した際に、寺侍として同行したと伝えられる。

山城屋の祖先とされる山崎三河守が、山城屋と直接結びつくかどうかは、今後の課題として慎重に検討していく必要があるが、「坂本村々地検帳」（天正 17 年〈1589〉10 月 7 日）や「山路之村地検帳」（天正 17 年〈1589〉11 月 5 日）などの『長宗我部地検帳』では、坂本村、芋生村、具重村、山路之村カツウ子や鈍子ノ川などの金剛福寺荘園において多くの給地を有し、その有力な荘園管理者として位置づけられていた。

これは土佐一条氏の支配時代から引き継がれた山崎三河守に与えられた給地であることは間違いないだろう。その子孫が近世に入り、山内藩政下でかつての実力を評価されて庄屋に配置されたとしても何ら不思議はなく、山城屋と山崎三河守とのつながりが全く根拠の無い話であるとは言い切れない。

（２）山城屋と紀州印南浦海民とのつながり

土佐清水市立中浜小学校下に所在する山城屋関連墓地の墓石調査から山城屋は、享保 20 年（1735）に没した中浜浦庄屋・山﨑仁兵衛やその子・彦左衛門（宝暦 10 年、1760 年没）につながると推測される。山﨑仁兵衛は享保４年（1719）「足摺山金剛福寺奉加帳」に 566 匁 6 分を寄進した記録が残っており、松尾浦庄屋・山崎彦丞（607 匁 4 分寄進）、大浜浦庄屋・上原彦三郎（508 匁寄進、大浜を本拠として酒屋を経営する本家袋屋当主か）などとともに多額な寄進を行っており、鼻前七浦で群を抜いた財力があったことを示している。また、松尾浦庄屋・山崎彦丞は、松尾海運寺（金剛福寺末寺）に所在する弘法大師像の台座にその名が（円形に記された寄進者の一人として）確認できる。彼は、奉加帳に「記刕印南浦舟頭」（紀州印南浦船頭）と記載しており、紀州印南浦出身者であることを添え書きしている。

この彦丞と中浜浦庄屋・山崎仁兵衛とは、どのようなつながりがあったのだろうか。同じ山崎姓を名乗り、両方が同時期に隣接する浦の庄屋として鼻前地域で勢力を誇っていることを考えると血縁関係など何らかの関係性があったと見るのが自然であろう。一方の松尾浦庄屋・彦丞が紀州印南浦出身者であることを考えると、山城屋の家系は、「紀州印南浦」「金剛福寺」という二つのキーワードで結びつけることができる。しかし、現時点においては、山城屋の近世中期以前の家系や紀州印南浦の旅漁海民との関係性について確証を得るには至っていない。

ただし、この墓地に紀州印南浦の角屋一族である角屋（久保田）儀三郎（墓碑では儀三浪と刻まれる）（文化６年没、1809）と角屋（久保田）与三左衛門（文政２年没、1819）の二基の墓石が所在している。

角屋儀三郎は、紀州印南浦の海民で日向での旅漁の帰路、土佐国西南部・鼻前沖を発見した人物である角屋甚太郎の子孫であり、松尾・明神浜船引湊を据浦に活躍した角屋与三郎の甥にあたる。また、与三左衛門についてはどのような人物であったか不明であるが、おそらく儀三郎の子、若しくは兄弟などの近親者であった可能性が高い。なぜ山城屋関連墓地に紀州印南浦旅漁海民の頭目である角屋一族の墓石が所在するのだろうか。角屋と山城屋の関係や松尾浦と中浜浦のつながりなど興味は尽きない。『印南町史』（和歌山県）では、儀三郎の墓石が山城屋当主の墓石近くに置かれていることから、山城屋の節加工における技術顧問として厚遇されていた可能性があると推測している。

今ある状況から断定すれば、角屋儀三郎や与三左衛門が、山城屋当主の墓碑と並列で配置されているなど山城屋の親族同様の丁重な扱いを受けていること、初代と三代当主が「儀右衛門」を名乗り、「儀三郎」の「儀」の字が共通しており、角屋は山城屋と何らかの関係性があり、客分的な待遇で扱われていたとの可能性もある。

（３）山城屋とその系譜

歴代当主の墓石をたどると、初代儀右衛門（1726―1787）、二代武平（武兵衛）（1769―1832）、三代儀右衛門（1789―1846）、四代武平（武兵衛）（1814―1857）、四代武平弟・儀兵衛（1828―1903）と続く。現『土佐清水市史上巻』では、五代文次郎（1865―1953）、六代源吉郎（1886―1928）となっている（６頁、山崎家系図参照）。

初代儀右衛門の妻（1798 年没）は、布村庄屋沖喜三進の娘であり、二代武平（武兵衛）は、三崎大庄屋沖家から養子で婿入りした人物である。この頃から屋号を山城屋とし、商いが本格的になされ、家紋も亀甲鳶から沖家家紋の三扇に変更された。このように土佐国西南部・以南地域の有力庄屋沖家と同域の豪商・山城屋とが深い血縁関係で結ばれている事実は、今後の土佐国西南部における廻船商人の実態を解明していくうえで興味深い。山城屋の全盛期は、三代儀右衛門と四代武平（武兵衛）の時代である。

（４）山城屋寄進の近世石造物から

その繁栄を証明する石造物が中浜天満宮と足摺岬金剛福寺境内に残されている。

一つは、中浜・天満宮の境内にある高さ約２メートルの一対の花崗岩製の石灯篭である。左右とも同じ銘文で塔身右面に「文政丁亥（1827）九月吉日」、正面に「奉寄進」、左面に「当浦山城屋儀右衛門」（三代）とある。塔は部分的に欠落しており、新しい石材を補充しているが銘文が刻まれている部分の石材は何とか現存している。

もう一つは、足摺岬金剛福寺の山門内側にある高さ約３メートルほどの一対の立派な花崗岩製の石灯篭である。本堂に向かって左側の塔身右面に「山城屋儀右衛門」（三

代)、正面に「奉献」、左面に「天保七丙申(1836)三月吉日」が刻まれ、その台座には「備後国住　棟梁尾道石大工山根屋　源四郎藤原傳篤」と刻まれている。製作した石工の出身地と氏名である。向かって右側の塔身右面に「天保七丙申（1836）三月吉日」、正面に「奉献」、左面に「山城屋武兵衛」(四代）とある。これはおそらく、豊後水道経由で備後国尾道から海路にて土佐国最南端・足摺岬に所在する金剛福寺まで取り寄せたものだろう。現在の伊佐漁港あるいは津呂漁港まで船で運搬したことはほぼ間違いないが、それにしても足摺半島上の海抜 60 メートルに近い海岸段丘面に立地する境内までどのような方法で運搬し、設置したのだろうか。

（５）尾道石工棟梁・山根屋源四郎藤原傳篤

平成 25 年度（2013）尾道市教育委員会が実施した石造物悉皆調査によると、尾道市域の石造物作製は、文政から安政にかけて盛んであり、天保年間（1830～1843）にそのピークがあったことが判明した。山城屋寄進石灯篭は、天保７年（1836）３月に建立されており、まさに山城屋全盛期と尾道市域の石造物作製のピークと軌を一にする。

金剛福寺・山城屋寄進石灯篭の銘文「棟梁尾道　石大工山根屋　源四郎藤原傳篤」は、源四郎をリーダー（棟梁）としてチームを組み、組織的に分業して工房として活動していたと推測される。また、山根屋源四郎傳篤の刻銘石造物は、天明５年（1785）から安政６年（1859）までの 74 年間で 51 点確認されている。おそらく複数の職人により代々名跡が継がれていったものと思われ

↑金剛福寺・山城屋寄進の石灯篭

る。その分布は、尾道市域とその周辺が圧倒的に多く。それ以外は、愛媛県内子・徳島県板野・高知県足摺岬（金剛福寺）の三箇所のみである。

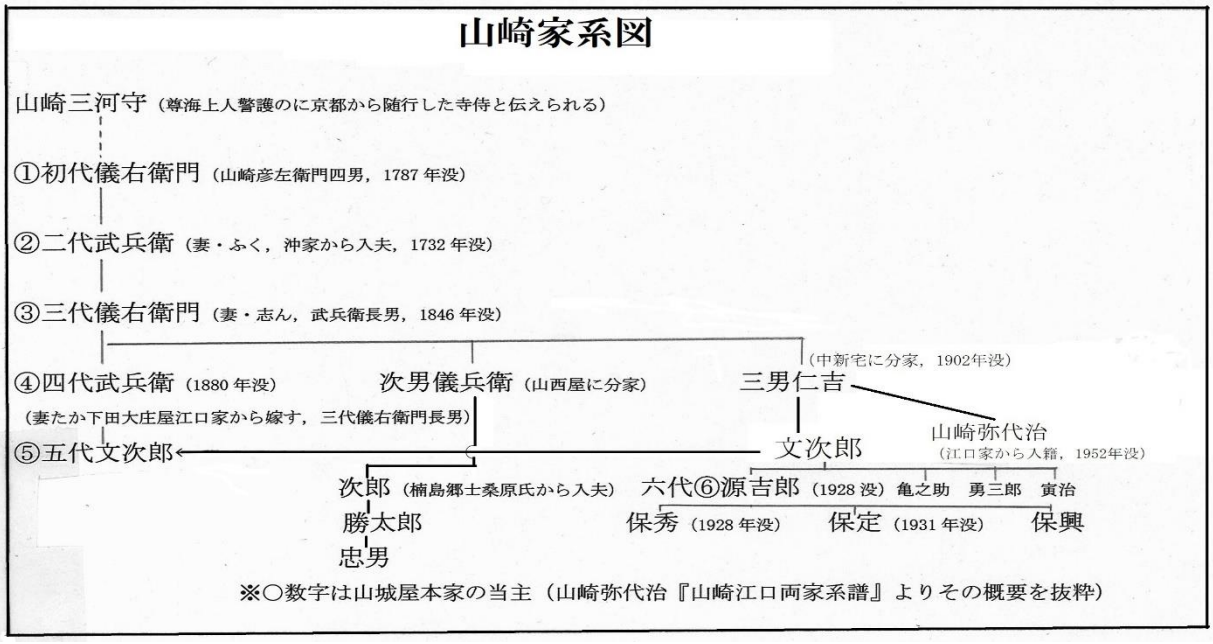
松田（2010）の研究によれば、土佐国では南北朝期以前の石造物の分布は仁淀川以西の地域に多く、特に、土佐清水市域は花崗岩製の石造物が多いことを調査して指摘している。彼は土佐清水市爪白に所在する覚夢寺（阿弥陀堂）の境内のほか、市域の石造物調査を通じて花崗岩製の石造物が多く、それらはピンク色のカリ長石を多量に含み、土佐ではみられない花崗岩の成分から分析して兵庫県の六甲花崗岩（山陽帯の新期花崗岩類）の可能性が高いことを明らかにした。調査した覚夢寺を含む爪白地区は、土佐一条氏の重臣が治めた場所である。

土佐一条氏やその外戚にあたる幡多荘の有力豪族・加久見氏等に関係するとみられる五輪塔等の石造物は、一条氏との関連性から兵庫津から交易によって土佐国西南部にもたらされたのではないかという推測も成り立つ。土佐国東部にこのような特徴を持った花崗岩製の石造物があまりみられない状況から先程述べた瀬戸内海・豊後水道を通じて海路輸送された可能性が高いと思われる。

この点では、近世の石造物も同様の輸送ルートと断定できる。その産出地については、兵庫津、中国地方（尾道や下関）など説の分かれるところではあるが、瀬戸内海・豊後水道を介した海の道は、中世から連綿と存在し、京阪神や中国及び九州方面と盛んに人・物の交流がなされていたとみるべきであろう。

（6）山城屋の衰退と終焉

山城屋の繁栄に陰りが見え始めたのが、四代武平（武兵衛）が 43 歳（1857）で亡くなって以降である。彼が没することで本家・山城屋の系譜は一時断絶するが、その時代に本家を支えたのは、四代武平（武兵衛）の弟・山﨑儀兵衛（1828―1903、三代儀右衛門次男）である。彼は、嘉永４年（1851）２月 12 日、23 歳のときに本家から分



家して山西屋を号した（『萬日記』1851 年、山西屋の財産管理記録）。カツオ節改良に尽力し、幕末から明治末にかけて兄亡き後の本家・山城屋の実質的な経営者であり、本家五代目と言っても過言ではない存在であった。また、その後に三代儀右衛門三男・山﨑仁吉（仁衛門）（1829―1902）も中新宅の屋号を号することになり分家した。

五代文次郎（1865―1953）は、分家・中新宅の出身で養子となって本家を継いだ。彼の代になると本家全盛期の財力に陰りがみえ、財産整理を行い 17 隻あったカツオ船が１隻にまで減った。この衰退の状況を中新宅二代目山崎弥代治は「先代武兵衛早世の混乱期、可成の財産を蚕食されて既に各所の出張は手放し、廻船業は廃業した」と記している。

五代・文次郎には、四男一女の５人の子どもがいた。彼は 88 歳という当時としては長寿を全うしているが、２人の息子の早世を体験している。子に先立たれた親の悲しみは心が裂けるような辛さがあったに違いない。彼が 49 歳のとき、次男・亀之助が大正３年（1914）に 19 歳の若さで没し、63 歳のとき、山城屋の後を継いだ長男・六代源吉郎が昭和３年（1928）に 42 歳で没している。

また、六代・源吉郎は、先妻との子どもが２人、後妻との子どもが１人、計３人もうけている。先妻との子どもは長男保秀と次男保定である。長男保秀は、源吉郎が逝去したと同じ年（昭和３年）に逝去し、次男保定は翌年相次いで逝去して不幸が続く。残された後妻との子どもである三男（保興）は、山城屋を離れ、郷里を後にして北海道の札幌市に居住し、生活している。山城屋六代・源吉郎の逝去が山城屋の事実上の終焉となった。

明治末から大正期に動力船が導入され、地先でのカツオ漁からカツオを船で追い求める遠洋漁業への転換について行けなかったことが終焉の理由であった。これより、五島列島やトカラ群訪島・伊豆諸島・三陸沖等に進出し、本格的な遠洋漁業が開始されるのである。

引用・参考文献

・松田朝由「中世土佐における石造物の特徴と展開」（市村高男編『中世土佐の世界と一条氏』高志書院、2010 年、163―190 頁）
・田村公利「近世国西南部の鼻前廻船商人の実像―紀州海民の動向と山城屋の足跡―」（『西南四国歴史文化研究会論叢よど第 14 号』西南四国歴史文化研究会、2012 年）
・中山　進「四．近世」（『土佐清水市上巻』土佐清水市、1980 年）

【編集後記】

コロナ禍の長期化が続いております。ゴールデンウィーク後のコロナの感染状況も気になるところです。感染を防止するのは、国民一人ひとりの油断しない対策が鍵だと思います。「うがい」「手洗い」「マスク」「三密を防ぐ」などの基本を徹底し、自分のためにも、家族のためにも、社会のためにもまん延防止を図ることが今は最重要であると思います。ともあれ外出自粛が呼びかけられている中、この期に一気に執筆を進めていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。（田村）